

宮澤賢治『春と修羅』を読む

—詩「岩手山」について—

黒澤 勉

目次

- 一 はじめに
- 二 詩「岩手山」
- 三 詩「岩手山」をめぐる対話

## 一 はじめに

本稿は平成十七年度に行われた、教養講座の『春と修羅』を読む』の中から詩「岩手山」について解説したものである。記述にあたっては、読みの便宜を考えて「です、ます」体、対話形式のスタイルをとった。詩「岩手山」は『春と修羅』所収の一篇で、「(一九二二、六、二七)」という日付けをもっている。すなわち、大正十一年、賢治二十六歳、前年の十二月から稗貫農学校の教師として明るく、元気に活躍しているころであった。

## 二 詩「岩手山」

### 岩手山

そらの散乱<sup>さんらんはんしゃ</sup>反射のなかに

古ぼけて黒くえぐるもの

ひかりの微塵<sup>みじんけいれつ</sup>系列の底に

きたなくしろく<sup>よど</sup>澱むもの

(ルビを含め初版本のまま)

三行目の「ひかりの微塵系列の底に」は、宮沢家に所蔵されている初版本の『春と修羅』の、賢治自筆の書き込みによれば「ひしめく微塵の深みの底に」となっていますから、こちらの方を最終稿とすべきでしょう。この一例

でわかるように、賢治は自らの作品を執拗なほどに推敲し続けた人でした。それにしても出版されたものにまで手を加えるとはあまりないことです。詩人として、芸術家としてそれだけ表現の完璧さを求め続けたことの現れといえましょう。

### 三、詩「岩手山」をめぐる対話

T (講師) この詩について『春と修羅』第一集中の傑作であり、あえて私は代表作の一つとして数える」(「観賞 日本現代文学宮沢賢治」原子朗)とか、「コロイド宇宙観の生んだ記念碑的傑作」(「宮沢賢治心象の宇宙観」大塚常樹)などともいわれ、評価の高い有名な詩ですが、読んだ第一印象はどうですか。

S (受講生) 私は盛岡に住んで、四季折々、毎日のように岩手山を見ています。でも正直言って、よくわからない詩です。そもそもこの詩に歌われた岩手山の四季はいつなのか、時はいつなのか、具体的なところがさっぱりわからない。何か抽象的なイメージのように思うのですが、絵でいえば抽象画であり、心象風景に近いような気がします。それと、岩手山のもつ力強さ、エネルギーといったものが感じられます。また、均衡のとれた詩、「南部富士」と呼ばれるにふさわしい、形の整った詩だという印象も受けます。

T そうですね。この詩では季節とかどこから見たかなどといったことは全く問題にならない。賢治は現実の岩手山を写生するように描いていないと思います。そういう意味ではきわめて観念的、抽象的なイメージで、そこがわかりにくいという理由でしょう。「抽象画」「心象風景」というあなたの指摘は当たっていると思います。賢治自身も『春と修羅』は詩集でなく「心象スケッチ」だと書いています。賢治の心の中に浮かんだ想像上の、イメ

ージ上の「風景」だということです。

今指摘された「均衡」ということを取り上げてみますと、確かにこの詩は前半の三行、後半の二行が見事に対応しています。詩の中で「岩手山」という言葉は使わず、これをタイトルとし、その岩手山の姿、イメージを、全く独自の言葉、捉え方でもって、生々しく描き出しています。「岩手山は何だ」という質問に対し、自ら「こうだ」と答えた、自分にとって岩手山はこうだということを賢治は示したといってもいいのかもしれませんがね。

S 「対応」ということは、昔習った言葉でいえば、対句ということですね。

T ええ、見事な対句です。その散乱―ひかりの微塵、反射のなかに―系列の底に、古ぼけて黒く―きたなくしるく、えぐるもの―澱むもの、という具合に、見事にその品詞、音数が対応しています。ただ、三行目の「ひかりの微塵系列の底に」は宮沢家所蔵の『春と修羅』には、賢治の筆跡で「ひしめく微塵の深みの底に」と推敲していますから、その散乱反射―ひしめく微塵の、となって品詞の対応としてはズレが生じています。

音数ということでは、前半は「その散乱」「反射のなかに」「古ぼけて黒く」「えぐるもの」と分けると七七七五、後半も同様に七七七五音になっていますね。ですから「口語定型詩」といってもいいかもしれません。それが又、岩手山という均衡のとれた単独峰にふさわしいような感じもしますね。

S 山のもつ力強さというのは、「もの」という名詞で結んでいることと関係があるような気がします。

T そうですね。教科書的にいえば体言止めということになりますが、特に「もの」という名詞を使ったことも効果をあげています。日本語の「もの」という言葉は「対象を特定の言葉で指し示さず漠然と捉えて表現する」（広辞苑）という働きがあり、古典では「ものに襲わる」などという使い方があって、「もの」には神秘的で怪しい、不思議な力をもつ、正体のよくわからないもの、といった意味あいがあります。賢治にとって岩手山とは、自明

なそこに明らかに見えて、正体のわかっているものではなく、謎めいた不可思議な力をもつ神秘的な「もの」であつたようです。

詩とは、手垢にまみれた固定化した見方を離れて、根源的に、生き生きとみる、発見的に創造的に、個性的にみる体験だと思ひますが、私達のもっている岩手山についてのありふれたイメージを破壊する強烈なパンチをこの詩はもっているように思われますね。

S 山を「もの」と捉えたというのはなるほど、賢治の大きな発見といつていいんでしょうね。

T 実は山を「もの」と表現したのは高村光太郎の「赤城山の歌」という短歌の換骨奪胎だと思います。これは恩田逸夫の指摘（「四次元」昭四十三年一月）ですが、光太郎の短歌に「赤城山」と題する「ああこれ天空をくぎ割りて立てるもの愚かさびてたつもの」という作品があります。この中で光太郎は、赤城山を「もの」と表現し、対句によって、一方では天空を区切って立つ「もの」、他方では語ることなく、愚かもののごとく立つ「もの」と、二つの面から把握しています。

賢治は高村光太郎を尊敬しており、東京に行った時、訪ねたことも知られています。この短歌は詩集に載っていませんが、何かの折に目に触れ、おそらく心に強く焼きついたことは間違いないと思われれます。以前に読んだ短歌が浮かんで、それを賢治流の世界観、イメージでもって、あらたに造形し直したのかもしれない。光太郎の「赤城山の歌」が先蹤作品としてあるということをお忘れはならないと思ひますね。

S なるほど。しかしそれにしても光太郎の歌は確かに赤城山の力強くそびえ、深い沈黙の中に古色蒼然と立ちつくしている様がよく伝わってきます。光太郎作品の「愚かさびて」という言葉が「古ぼけて黒く」とか「きたなくしろく」といった詩句に発展したと考えると、一見して非常識な、岩手山を蔑視したような表現も、少しわか

るような気もします。それにしても、よくも「きたなく」などと書けたのですね。岩手山をいつも美しいと思  
っている私など、腹が立ってきます。

今、話していてふと思いついたんですが、山というのはそもそも私たちが生まれるはるか以前から地球のマグ  
マの力により噴出し、隆起し、変化をとげながら存在しているものですね。山を見ることによって、地球の生命、  
その命の活動を感じることもありますね。

T 確かに常識的な観念として私たちは単純に、山は美しい、山は青く、また白く、夕日に輝いてその岩肌も染ま  
ってそれぞれに美しい、一度も「きたなく」など見えたとはいいたくありませんね。この詩は岩手山の肉  
眼で見た姿をスケッチしたのではなく、先程言ったように「心象スケッチ」であり、岩手山の姿を賢治は心  
中で思い描き、頭の中で「観想」したのでしょう。おそらく、花巻にいる時にこの詩は作られたので、現実の岩  
手山を見ないで「心の中の岩手山」として思い浮かべることができたのではないのでしょうか。「黒く」とか「き  
たない」という言葉は、後で述べる「修羅」というイメージが関わっていると思います。

賢治は「盛岡在住の十年の学生生活においておそらく三十度以上」(関登久弥『宮沢賢治素描』岩手山登山を  
したといわれています。そうした体験をもとに数々の短歌を作っています。たとえば次のような短歌

夕霧の／霧山だけの柏ばら／かしの雫降りまさりつつ (四五六。大正六年「霧山だけ」は岩手山の別称)

岩手やま／いただきにして／ましろなる／そらに火花の湧き散れるかも (五五〇。同)

岩手やま／あらたに置けるしらゆきは／星のあかりにうすびかるかも (六一七。同)

これらの短歌は写生風です。こうした写生風の短歌を経て、到達したのが、この「岩手山」の詩ではないかと  
思います。この詩は、そうした賢治の岩手山体験ばかりでなく、その理科的な知識、認識、その教養や世界観抜

きには、理解しがたいようですね。

S 言葉の辞書的な意味はわかっても、どうもよくわからないのですが、そもそも、「散乱反射」というのはどういうことなのでしょうね。

T 「散乱」は賢治の愛用語でした。賢治がどういう意味をこめてこの散乱という言葉を使っているか、他の例からも考えてみるのが大切だと思います。

この詩の場合、まず言えることは、これが自然科学の用語で、「光の散乱」つまりscatteringの翻訳語だということです。「ひかりの微塵系列」という言葉でわかるように、賢治は光を「微塵」と捉えています。現代物理学によると、光は波の性質と粒子の性質をもつとされており、光が通る(「透過」)時、光子と呼ばれる光の粒子が屈折、散乱、反射、回折するなどの現象が起こるとされています。「もいちど散乱のひかりを呑む」(詩「有明」)「光はるかに散乱の」(詩「岩手公園」)という詩句もあることでわかる通り、賢治は光を四方に散乱する粒子の如きものとして、また「微塵系列」という表現によると、その粒子が層をなし、秩序だてて配列される波のようなものとして捉えているようです。私たちの「肉眼」では様々な形や色の雲、その背景にある色彩豊かに変化する空といったふうに見えるわけですが、賢治はそれを「自然科学的な想像力」でもって捉えて、肉眼で見える奥にひそむ「実相」をあぶり出している、といってもいいのかもしれませんが。

『イーハトーボ農学校の春』という小品を見ますと、「砂土がやはらかない匂の息をはいています」とか「(水は)水銀のように青く光り、たまになって春の上に飛びだすでしょう」とか「楊の木でも樺の木でも、燐光の樹液がいつぱい脈うっています」などと書いています。肉眼で見えない、感じられないものを、生き生きとした想像力をもって描いているのです。それは科学的、顕微鏡的な、しかも、生き生きとした想像です。

「手紙三」という文章を見ますと、顕微鏡のことが取り上げられています。賢治はそこで六百倍、八百倍、千倍、二千倍の顕微鏡があるが、拡大度が大きくなるほど、より多くの光が必要になることを述べています。また、人間の眼に感じられる光の波長を取り上げ、それ以下のものの形は結局、人間の限界として見ることができないうということ指摘しています。人間の眼に見えない光や、物が存在するのだということはいいたかったのでしよう。最後に、そうした「眼に見えないものをも見る」ことができる人は「自分の心を修めた」人なのだと書いています。

「岩手山」というこの詩は、常識やら肉眼で見えてくるものを遥かに越えて、「ここを修め」ようとした賢治の心眼に映じた、心眼の光によって照射された岩手山の姿を描いているように思われるのです。

以上のように、賢治は「心眼をもって」岩手山を眺め、そして明るい大空をえぐるように、力強くそびえる岩手山をマクロの眼で見ると同時に、ミクロの顕微鏡的な眼で把握しているようにも思われます。

S 「そらの散乱反射のなかに」などと言われると意表をつかれ、何だこれは、と言いたくなりますが、太陽光線が蒸気に当たって乱反射し、それが空の色や雲虹などを形作ると考えれば、なるほどという気がします。「天体科学者の目」で空を見たということですね。

T 光や色彩についての科学的知識がなければ、この詩は生まれなかったと思います。しかし、それではこの詩は科学的認識を人々に示した詩なのか、といえ、そうではない。科学的認識を越えて、更にその奥にある真の岩手山の姿を「心」に映るイメージによって捉えようとしたと思います。結論的にいって、科学的な把握の奥に宗教的メッセージがこめられていると思います。

S えっ、今度は宗教ですか。どこにも宗教的な言葉など使われていないのに、どうして又。



T 先程「散乱」という言葉は、物理学、光学の用語だといいましたが、実は同時に仏教語でもあって、「凡人の心が対象によって乱れて定まらないこと」を指す言葉でもあります。この詩の場合も表向きは光学的な意味をもつものですが、含みとしては光子の散乱の中に、心の散乱ということがありそうです。「散乱のわが心相よあつまりてしづかにやすらへ」「散乱の諸心をあつめそのかみの菩薩を思ひ」などという詩句も賢治作品には見えるのです。「古ぼけて黒くえぐる」「きたなくしらく澱む」という表現も「修羅なる」岩手山の姿であると思います。

S えっ。ということは岩手山は「修羅」なんですか。そもそも「修羅」って、何なんですか。

T 「修羅」というのは阿修羅ともいい、仏教語で十界、六道の一つです。十界とは、迷いと悟りの世界を十種に分けたもので、地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界で、このうち地獄界から天上界までの六つが凡夫の迷いの世界、後の四つが聖者の悟りの世界（六凡四聖）だといわれます。迷いの六つの世界は、苦しみに満ち、業によって輪廻転生する世界で、六道輪廻といえます。『法華経』では、一切のものが成仏できると説き、十の世界が相互に具足し合う。十界の一つ一つが互いに他の九界を備えている、だから縁があれば地獄の衆生も仏となる。逆に仏も因縁あれば迷界の衆生となる。つまり世の中には絶対の悪人も絶対の善人もない、と主張しています。これを「十界相互思想」といいます。十界図は浄土教美術の一つで、四聖界と六道絵とを合わせた図です。

賢治が国柱会から送られ、日常床の間にかけておいた「十界曼荼羅」は日蓮宗の本尊としてまつられているのですが、賢治はこれを毎日、拝んでいました。私はそれを宮沢清六さんのお宅で拝見したことがあります。賢治がこれを国柱会から送られたのは大正九年、二十四歳の時でした。その曼荼羅を見ますと中央に「南無妙法蓮華経」と大書され、その下に「天照大神八幡大菩薩」「日蓮」とあり諸仏、諸菩薩、諸王の名が記されています。

日蓮は「一人ももれず、此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にさらされて本有の尊形となる。是れを本尊とは申す也」(『日女御前御返事』)と書いており、この曼荼羅は「妙法蓮華経」の妙法五文字によって、真実の存在の光に照らされて、聖なる形相に立ち返る、という世界観を示したものだといわれています。私はこの詩は、岩手山を通して、その十界曼荼羅の世界を描いたものだと思います。

S ずいぶん大胆な説で、失礼ながらには信じがたいのですが…。そもそも、どうして岩手山が「修羅」なんですか。

T 「修羅」という言葉は、賢治の作品や人生を理解する鍵になる言葉です。賢治自ら詩集に「修羅」と題し、しかもそれを第三集まで出版する予定で作品をまとめていました。詩集として同じタイトルを使うというのは珍しいことで、そのような例は私の知る限り、ありません。それだけ『春と修羅』という題は重味をもつものといつてよいでしょう。

「修羅」の仏教的な定義とは別に、賢治はそれを様々なイメージをもって表現しました。先程お話しした「黒く」「きたなく」などという言葉には、修羅的なもの―修羅のエネルギーとでもいうべきものがひそんでいるように思います。私達が普通、美しいとか、優美だとかみる岩手山は、実は火山であり、いつ地中のマグマが噴出するかわかりません。そうした火山活動について賢治は精しく知っていましたから、山を単に美しいもの、安定してゆるがない、不動のものとは決して見なかった。それどころか、山に恐ろしい「魔性を秘めたデーモン」を感じたのだらうと思います。それは内なるデーモンの発見ともつながるものでした。

S 物事の表面を見るのではなく、深層を見る。なるほど、賢治の童話にはそのようなことをテーマとした作品、たとえば『注文の多い料理店』や『ひのきとひなげし』『どんぐりと山猫』など、通俗的な価値観との戦いをテ-

マとしているのかもしれませんがね。

それにしても、科学的なものと宗教的なものが融合して一つの世界を築いているというのは何ともスケールの大きな話ですね。

T 科学的—宗教的ということと同時に、視点の移動、転換が面白いですね。詩の前半は下から抜きん出て聳え立つ、いわば地中のマグマが噴出して形をなした岩手山だとすれば、後半は、大気中にひしめいている光の粒子が沈澱し、凝り固まってできたものと見ているのです。岩手山の姿を大地のエネルギーによって、屹立し、同時に、大気のうち沈澱するものとして捉えた賢治は、宇宙的、根源的なイメージをそこで提出し、私たちの岩手山像を破壊しようとしているようにも見えます。「光の澱」という言葉も賢治の好きな言葉で、光が宗教的、聖なるものとすれば、沈澱した「光の澱」は悪魔的なるもののシンボルともいえるでしょう。

私はこの詩を「光の粒子中を黒くめぐり、そびえる岩手山よ。光の粒子の中に白く澱んでいる、デモーニッシュユな、畏怖すべきエネルギーを秘めた岩手山よ」と勝手に訳したことがあります。

もう一つ大切なのは、岩手山は賢治自身の姿でもあるということですね。

S しかし、「岩手山」というのですから、「岩手山」という山を捉えた詩ではないでしょうか。

T 科学は対象と自己を明確に分離し、対象を客観的に観察します。しかし詩—広く芸術にあつては、対象—自己の区別はなくなり、対象の描写の中に自分が溶け込んでいます。自他融合の生命把握、そこから生まれる独自のイメージの創出、それを芸術家はめざしています。「岩手山」は「岩手山」であると同時に、「賢治」でもあるわけです。

S 科学的な見方の方が単純、明快でいいですね。

T 確かに、誰にでもわかる、納得できるという点では科学的な認識はすぐれています。しかし、自他融合の生命 94  
感覚の創出、それによって私達の生命感覚が豊かになるのではないのでしょうか。感動が人間を豊かにするのではないのでしょうか。それはそうと、もう一つ大切な点を指摘しておきたいと思います。

S と言いますと。

T 聖俗、両面を含んだ岩手山のイメージは、「修羅の成仏」という法華経の重要なテーマを示しているということです。賢治に「ひのきの歌」という短歌があります。

雪降れば昨日のひるのわるひのき菩薩のすがたにすくと立つかな（四三四）

ひのきひのきまひるみだれしわるひのき雪をかぶればばさつ姿に（四三五）

（短歌の下の番号は、ちくま文庫『宮沢賢治全集』所収の短歌の整理番号）

なにげなく、風にたわめる黒ひのきまことはまひるの波旬のいかり

これらの短歌は、ひのきが雪におおわれて聖なる菩薩のような面をもち、また反面、黒く立つその姿は波旬はじゆんのいかりであり、悪魔的な力をもつものとして捉えられています。そして大切なことは「いかり」に狂ふ修羅も

「菩薩」になりうるということです。「山川草木一切が成仏する」という法華経の教えは内省的で、時に自虐的、

自棄的な苦悩に喘ぐ賢治にとって、まさに苦悩からの脱出を説く救いの経典だったと思われれます。

S なるほど、私たちの心にも確かに善と悪が、強さと弱さ、矛盾し対立するものがひそんで、それで私たちは苦しんでいますね。今度岩手山を見たら、そうした人間の心を思って、友達を見るように岩手山を見つめたいと思いますね。

T 『楢の木大学士の野宿』という作品を見ますと、賢治は岩手山を「イーハトブさん」、姫神山を「ヒームカさ

ん」と親しんで呼んでいます。山は賢治の心の友であり、友を思い浮かべるように、賢治は山々を思い浮かべたようです。山々を描いた沢山の詩や散文は、そうした山々との交流から生まれたものでしょう。中でもこの「岩手山」という詩が重要なのは、「山川草木一切成仏」という法華経信仰を高らかに宣言し、成仏せんとする修羅の山を描いたからだ、といえはいいすぎでしょうか。

S 登山といえば、現在はスポーツの一種と考えられていますが、かつては宗教的な行であったようですね。岩手山も「お山」として崇められ、「お山参り」が行われていたようですが…。

T そうですね。岩手山は古くから神聖な道場として崇められてきました。日本古来の山岳信仰に阿弥陀・薬師・観音信仰などの仏教信仰が加わり「岩鷲山大権現」として信仰を集めたといえます。「権現」とは仏・菩薩が衆生を救うために、種々の姿をとって権（かり）に現われること、また、その現われた姿のことをいいます。

岩手山の頂上は薬師岳で、その下の外輪山の中の御空火口の火口岳を妙高岳と呼び、その下に岩手山神社の奥宮を十五頭の権現様として、奉納しています。

妙高岳は須弥山（しゅみせん）を漢訳した言葉です。須弥山は高さ八万由旬<sup>ゆじゆん</sup>、中腹には四天王、頂上には帝釈天を主とする三十三天が住み、月や太陽は須弥山の中腹を回り、須弥山の上方には兜率天<sup>とそつ</sup>・梵天等の住む天界があるとされています。四天王は持国天（東方）、增長天（南方）、広目天（西方）、毘沙門天（北方）を守る護法神で、「十界曼荼羅」の四方に記されているものです。

端的に言って、賢治にとって、岩手山―妙高岳は仏であり、御神体であり、南無妙法蓮華経であったのだと思います。賢治の短歌に次の二首があります。

須弥岳の瑠璃のみそらに刻まれし大曼荼羅を仰ぐこの国

はらからよいざもろともにかがやきの大曼荼羅を須弥に刻まん（大正八年）

この二首は須弥山Ⅱ妙高山という本尊を囲む曼荼羅をイメージしたものです。賢治の宗教心は仏典や日蓮、釈迦といった人、経典を越え、この山や宇宙そのものを包括するような巨大な宇宙意識に立つものでした。

S どうも詳細にわたる説明ありがとうございます。お陰様でほんやりとわかりかけてきたような気がします。

T いいえ、どういたしまして。ほんやりしかわからないのは、こちらと同じです。この詩は、それぞれの読み手によって様々な読みが可能です。それを互いにもちよつて賢治という天才に束になって挑戦するのも楽しいと思います。わずか四行のこの詩は、一冊の書物をもって解説しなければ読み解けぬほどの深い内容をもつものだ、そういう意味でも賢治の詩を代表するものだ、ということがおわかり頂ければと思います。